国際高等研究所シンポジウム

文化の翻訳可能性

大橋良介 編

人文書院

語用論的見地から見た文化の翻訳可能性

ノルデンシュタム・トーレ

広域的文化の理解

ますます増大しつつある広域文化間の接触を通して形成される世界にあっては、文化的産物を一つの文化から他の文化へ翻訳することが、実際上世界のすべての文化において日常生活の事柄になっている。私はここで、意味を担う諸々の現象、例えば、言語表現、行為、身振り、図版、映画の連続場面等の翻訳に焦点を絞ってみたい。このような現象をある文化から他の文化へ翻訳する際に生じ得る根本問題は、理解の平面上に存している。意味を担う現象は文脈依存的であり、ある一定の表現の文脈がある個人に知られていない場合、その人には理解の困難が生じてくる。

このように意味を担う諸現象の本質を構成する文脈依存性というものが何を意味するかということは、実例によって明らかにするのが最も良いであろう。私は、この講演の本論において、二つの異なった文化から二つの実例を提示することになる。

第一の例　イランのビラ

文化の翻訳にとって、聴く者（読む者、観る者）の言語能力とともに事柄に関する知識もまた、二つの文化の違いに応じて拡大されなければならない。

多くの読み手の側での能力拡大の必然性は、次のビラの実例で明らかに示される。そのビラの文章は、七〇年代の終り、シャーの尊称が崩壊する少し前、イランで起こったデモで使われたものである。原文は、入手できていないが、このことは、イラン語を使いこなせない我々にとって、どっちみち重要なことではない。翻訳によれば、その文章は以下のようになっている。

「勇気ある兵士よ、ファラオのためにモーセを殺すな。

ヤズィードのために預言者の娘の息子を殺すな。」

イスラームの専門家ジャン・ヒジェルペは、その著書『政治的イデオロギーとしてのイスラーム』の中で、この通告を次のように解釈している。「この通告を読んだイスラームの兵士達に、この文章は強い心理的影響をもたらしたに違いない。この通告は、一方でコーランのよく知られている図式、つまり俗権（ファラオ）と神権（モーセ）との対立図式を示しており、他方で、そして何よりもシーア派イスラームの決定的な事件、すなわち預言者の娘の息子フセインが、ウマイヤ朝のヤズィードの主導権のもとに殺されたということを示している。この出来事の物語は、とりわけ毎年ムハッラム月の一日から十日まで行われる殉難祭によって、シーア派の人々の意識の内に深く植え付けられている。フセインの死は、シーア派の表象世界の中心として、非（シーア派）イスラームの権力に対する殉教と蜂起への準備をつくりだす。」さらに彼は続ける。「シャーとヤズィードとの組合せは、深く植え付けられている感情複合を政治的行為、すなわち蜂起へと導く。しかし、このような観念に無縁な外部の観察者にとって、このビラは理解できないように思われるにちがいない。シャーに対するデモが、まさにフセインの死を記念するムハッラム祭のもと、九日と十日（一九七八年十一月十日と十一日）に最高点に達したことは注目すべきことである。」

ビラの本文の意味を理解できるようにする上での第一点は、本文をペルシア語からドイツ語（ノルウェー語、英語等）へ翻訳することである。しかし、純粋な言語の翻訳の後に続くのは、八〇年代の初め以来、私が文化の翻訳をずっと特徴付けてきた事柄である。ビラの本文は、本文を理解するために知っておかなければならない、あるいは習熟しておかなければならないある一定の連関に組み込まれている。ビラの本文は、そこに書かれている通告を正しく理解できるために知っていなければならないイスラーム史の人物や出来事を示している。ジャン・ヒジェルペは、その本文を簡単に説明する際に、一連の用語（「シーア派の表象世界」「ムハッラム月」「コーラン」「シャー」等）を使用しているが、それらの用語は、まだそれらに精通していない人達にとっては同様に説明されなければならないものなのである。

精神科学者がイラン語の原文への注釈の中で行なっていることは、精神科学の営みにおける一範例である。精神諸科学においては、人間は文化的存在として研究

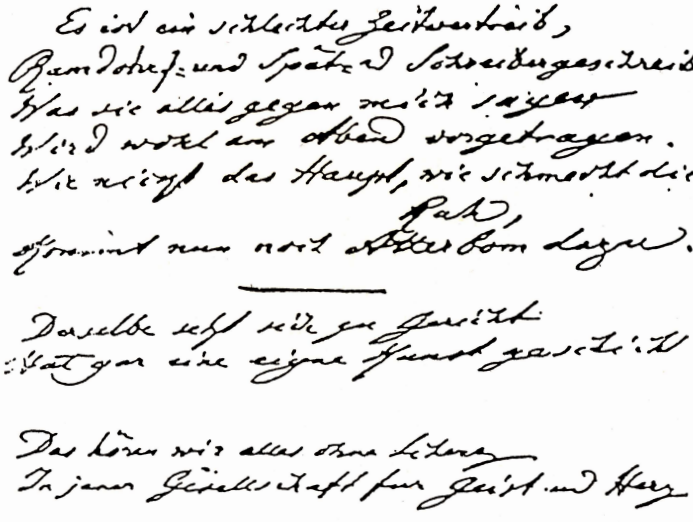
される。人間を文化的存在として研究する際の根本要素は、まさしくイランの例で示されたようにすることの内に、すなわち、題材として扱われている者達が自己自身と自分の置かれた状況とをいかに把握したかを叙述することの内に存している。このことができるためには、扱われている者達の概念が、それらが向けられる読者に理解可能となるように叙述されなければならない。当該の領域で扱われている者と読者あるいは聞き手との間の文化の距離が大きければ大きいほど、扱われている者達とその者達の行為が織り込まれている社会的歴史的文脈を立ち入って説明する必然性はますます大きくなるのである。

第二の例　ゲーテの断片

文化の翻訳の中心的な構成要素を明らかにするために、私は、簡単にもうひとつ別の例を考察しよう。今度もまた、違った文化から取ってこられた例である。

ゲーテの遺稿の中に、以下のような一つの詩の草稿が見出される。問題になっているのは、見たところ完結していない原稿であるが、もしかすると著者自身後で立ち戻ろうと考えていたのかもしれない。

古い手書きのドイツ語の文章を読むのに慣れていな


Es ist ein sittlich Zeitvertreib,
Rein Jahr- und später Schreibegezänk
Was sie alles gegen mich sagen
Wird wohl am Abend vorgetragen.
Sie wiegt das Haupt, wie schmerzlich die
Pak,
Stimmt nun noch Alles vom Lager.

Dasselbe ich sie zu gesteht
Hat gar eine eigne Hand gesteht

Das hören wir alles ohne Leidenschaft
In jener Gesellschaft für Geist und Herz

い人には、以下の書き替えが役に立つであろう。

Es ist ein schlechter Zeitvertreib,
Ramdohr- und Speth- und Schreibergeschreib ;
Was sie alles gegen mich sagen,
Wird wohl am Abend vorgetragen.
Wie nickt das Haupt, wie schmeckt die Ruh,
Kommt nun noch Atterbom dazu.

Derselbe setzt sich zu Gericht.
Hat gar eine eigne Kunstgeschicht'.

Das hören wir alles ohne Scherz
In jener Gesellschaft für Geist und Herz.

悪しき気晴らしである、
ラムドールとシュペートとシュライバーの書き殴ったもの。
奴らが私に向って言うことはすべて、
おそらく今夜朗読されるだろう。
頭がいかにうなだれていることか、平安がいかに味わわれていることか、
今やアッテルボムのものも加わってくる。
アッテムボムは法廷に身を置く。
それどころか自分の芸術史ももっている。
私達はこれらすべてを冷やかさずに聞く
精神をよくし心をあたためるためのかの会合で。

ドイツ語を解さない人には、翻訳が必要である。しかし、この場合、本来の理解の問題は、翻訳によってはまだ解決されていない。いかなる連関からも引き離されては、この詩の草稿から、ほんの僅かな意味しか取り出され得ない。著者は、本来何について書いているのか。例えば、「ラムドールとシュペートとシュライバーの書き殴ったもの」という表現はどういう意味なのであろうか。彼等は誰であり、そして、何か明らかにゲーテの感情を害するようなことをしてしまったのであろうか。アッテルボムとは誰であり、そしてどのようにして裁判官になったのであろうか。ゲーテは、上記のアッテルボムのどのような仕事に関係したのであろうか、そして「精神をよくし心をあたためるための会合」とは何を意味するのであろうか。

「悪しき気晴らしである」という言葉は、ゲーテの遺稿中に発見され、一八九三年に初めて印刷された。スウェーデンの文学研究家カール・サンテッソンは、一九三二年に書かれた優れた短いエッセイの中で、この詩の草稿に関連する問いに説得力のある答えを与えた。博識な文学研究家にして、一九世紀のスウェーデンの著述家ペル・ダニエル・アマデウス・アッテルボムの専門家である彼は、そのエッセイの中で、きわめて高水準の文芸学的かつ文化史的な研究成果を報告している。

既に早い時期、ある研究者が、アッテルボムの名前はゲーテでは二度、しかも一八二一年六月二十六日の日記の中で言われていることを指摘していた。そこには、次のように書かれている。「明日の発送のための準備。植物の色について多少口述。四人で昼食。レンツの鉱石。宮廷顧問官マイヤー。アッテルボムのローマからの手紙。」かつて、これは、アッテルボムが一八一八年の五月、彼の哲学の教師シェリングにローマから送った長い手紙に関係があると見なされていた。ゲーテは、ひょっとするとこの手紙の写しを読んで、そこに書かれている新しいローマ文化への彼自身の見解に対する批判に感情を害したのかもしれない。

カール・サンテッソンは、よりすぐれた提案をなした。つまりゲーテは、彼の友人ハインリッヒ・マイヤーと一緒に、少し前に初めて出されたアッテルボムの論文を読んだとするものである。ベルリンの雑誌『仲間（“Der Gesellschafter”）』は、一八二一年五月十一日から二十三日まで、アッテルボムの長い記事を八段に分け、「ローマからの手紙の抜粋（かの有名なスウェーデン人詩人アッテルボムからガイアー教授へ）」という表題を付けて掲載した。それは、ゲーテの日記にアッテルボムへの言及が現れるほんの数週間前のことであった。これによって、謎の解明が始まる。

アッテルボムは、一八一八年の春と夏ローマに滞在し、彼がその地で見付けた新しいロマン派の彫刻について熱狂して書いた（『ナザレ派』）。この連関で、彼は、ワイマールの巨匠に対する以下のような批判文を載せた（『仲間』の記事からの引用）。

「それどころかゲーテは、『ライン地方とマイン地方の芸術と古代』の第二のノートの中で、自分自身の目で見てもいないものについて全く乱暴に判断を下しており、本来はメングスの若い時の学説をふまえたはずの彼の鶴の一声を、彼の解決しようと思っていた論争点の内にもたらしたが、それは、彼の意志に反して、

真の言葉の混乱をもたらすことになった。このようなやり方は、常に、相互に反する一方的性格、つまり受け入れられるか否定されるかのどちらかという一方的性格をまさに誘い出すに過ぎない。若い芸術家やその友人達は、この老詩人のあまり良いとは言えない思いつきの責任を、ゲーテと数十年にわたって付き合いのあるマイヤーという名前のワイマールの理論好きの画家に転嫁した。彼は、学識のある人間ではあったが、画家としては三流で、その芸術論、学問面においては、およそ彫刻のボウテヴェックのような者であった。」

サンテッソンは、アッテルボムが、ゲーテへの関係においてはむしろ、ゲーテが上述の画家マイヤーと一緒に執筆した文章「新しいドイツの宗教的愛国的芸術」に言及しなければならなかったことを指摘している。ゲーテは、そこで、マイヤーの助けを受けて、ナザレ派のロマン主義を「その宗教的擬古調的傾向、カトリック的中世の形成と象徴への平身低頭、自分の見方によれば、神秘主義と感傷的偽信との全く病的な雰囲気」（このようにサンテッソンはまとめている）と粉々に切り刻んでいる。このように、アッテルボムとゲーテは、新しい芸術の価値についての極度に異なった理解をもっていた。二人の芸術仲間ゲーテとハインリッヒ・マイヤーとはちょうどこの「ローマからの手紙の抜粋」を読み、一八二一年七月二十六日一緒に食事をしたとき、この文章に憤慨したと仮定するのが、唯一理にかなった見方であろう。

ここからまた、ゲーテが、上の詩の草稿で触れている他の人物についても身元を確かめることが可能になる。ラムドールとは、ゲーテがずっと以前に論争した美学者のF・W・V・ラムドールであろう。しかし、おそらくここでゲーテは、一つの誤りを犯している。彼が本当に考えていたのは、中世のイタリア芸術の傑出した専門家、この分野で一人の人物を際立たせようとするなら好んで「芸術史の父」として讃えられる芸術史家、C・F・ルモールであろうと思われる。実際にゲーテの書き間違いが問題となる証拠は、ゲーテが日記の中でも一度（一八二一年二月二十三日）、「ルモール」の代わりに「ラムドール」と書いていることである。

フォン・ルモールは、雑誌『芸術誌（“Kunst-Blatt”）』の寄稿者であったが、その雑誌には、数ある文の中で、Y-berへの署名の付いた寄稿文も載せられている。サンテッソンは、この署名は、歴史家にして美学者であるA・W・シュライバーのことだと提言し

ている。その同じ雑誌には、B・シュペートという者も寄稿しているが、彼は、その著『イタリアの芸術』（一八一九）の中で、大胆にも、ゲーテが『イタリア紀行』でボローニャの巨匠について述べていることを痛烈に批判している。

今や、以上のことから、ゲーテの草稿の隠れた帰結、「私達はこれらすべてを冷やかさずに聞く／精神をよくし心をあたためるためのかの会合で」という部分も説明できる。「精神をよくし心をあたためるための会合」とは、新しいロマン派芸術の創り手や賛嘆者に関係付けられる。しかし、確かにここにはなおそれ以上のほのめかしも含まれている。つまり、アッテルボムの手紙が載せられた『仲間』は、その完全な表題は『精神をよくし心をあたためるための仲間もしくは雑誌』だったのである。こうして我々は、手元にある概説書の専門知識の導きのもと、ゲーテの断片の落ち着くべき文化史的景観に案内された。このことこそ、先行する時代の文化を解明し、我々が歴史的痕跡という形で出くわす意味を担う諸部分が、実際に我々の目の前に意味を担うものとして現れてくるために、文化の翻訳という概念に要求される本質部分なのである。

結　語

二つの実例をもとに、私は、文化の翻訳が言語の翻訳のみならず、何よりも知識の拡大を含んでいることを示そうと試みた。翻訳の受け取り手は、本文を、それが組み込まれている行為の社会的歴史的文脈において見、またそこから理解するように導かれなければならない。

イランのビラとゲーテの断片は、語用論的平面の理解との連関において人が突き当たる問題のいくつかを示している。その問題は、固有名詞が我々の理解の中で果たす役割と結びついている。人物名等は、例えば、イランのビラの本文やゲーテの断片の理解にとっては決定的な役割を果たしている。

我々は、このことを次の言葉でまとめることができよう。すなわち、局部的な関係についての知識は、文化の理解そしてまた文化の翻訳に際して中心的な役割を果たしているということだ。さらにここで我々は、言語の蓄えと経験に即した蓄えとが十分でないとき、二重の能力拡大が必要であるということを見る。例えば、ある文化においてある行為がわからないとき、この行為を翻訳できるものは何もないのである。

（秋富克哉訳）